

<研究ノート>

文形成の深層・中国語の文形成 (三)

馮 蘊澤

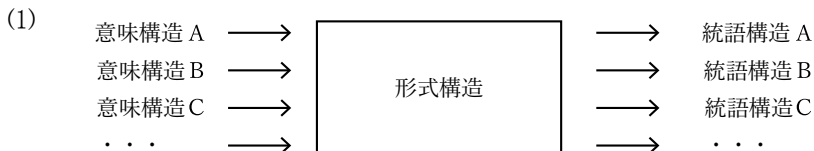
4. 文形成概観 (承前)

4.1 導入

伝統文法 (構造主義理論をベースとして統語成分分析——「句子成分分析」) は言語の最も表層の事実を対象に、文をより小さい「統語成分」(句子成分) に分析し、分析された統語成分を位置、意味機能、及び品詞類型の3つの情報を持つ「三位一体」の存在として記述する。本論はこれまではまず、統語成分の概念は文形成メカニズムの説明に非有効的であることを述べてきた。いわゆる「統語成分」の位置情報と意味機能の情報は類型と数の二つの面において、「1対多数」の非対称性対応関係にあり、このような非対称性対応関係の事実から、より深層のレベルでは、位置情報の担い手である形式成分の連続である形式構造と、意味機能情報の担い手である意味成分の集合、つまり意味構造はそれぞれ別々の独立した階層、つまり重層構造を成しているものと考え。意味成分と形式成分の間に対応関係があり、こうした対応関係に基づいて、意味成分が形式成分に配置される結果、表層のレベルで、位置、意味機能、及び品詞類型の3つの情報を持つ「統語成分」が実現する、つまり、統語成分は形式構造の構成成分である形式成分と意味構造の構成成分である意味成分が結合することによって生じる二次的産物である。形式構造のパターンは1つの言語において1つのみであるのに対して、意味構造は、意味成分の構成が文によって異なり、文形成の都度に新しく構築されるものである、このため、可能な文の数だけ類型がある、また、これによ

て、同じ形式成分に対応する意味成分の類型は文によって必ずしも同じではないという、類型における位置情報と意味機能情報の「1対多数」の対応関係が生じる理由である。また、「数」の面においても、1つの形式成分内に1つの意味成分のみ配置される「1対1」の対称性の関係もあれば、1つの形式成分内に複数の意味成分が共起するというもう1つの意味での「1対多数」の非対称性の対応関係の側面があり、このため、数の面においても、同じ文中に、統語成分の類型によって同じ統語成分（例えば状語など）が複数存在するという、数の面の「1対多数」の非対称性対応関係が生じる理由である。

以上のようなことから、文形成のメカニズムについて次のように述べることができる。つまり、1つの言語に1つのみある形式構造は、言語話者が内的に持っている無意識の知識であり、当該言語社会に共有される知識である。他方、意味の構造、つまり意味成分の構成は文によって異なり、その都度構築される。このような意味から、文形成は、その都度、意味構造を構築することから始まるものといえる。言語話者が伝達の意図に基づき、内的に持っている意味構造に関する規定や制約に従い、必要な意味成分と、それぞれの意味成分を担う言語単位を選び、意味構造を構築する。文ごとに構築される意味構造の意味成分は、意味成分と形式成分の対応関係に基づき、形式構造の形式成分に配置され、意味成分の集合である意味構造が「その内部に意味成分が配置された形式成分」、つまり表層の「統語成分」の連続である「統語構造」として実現する。このような過程を図示すると、次のようになる。



表層のレベルでは、必要に応じて、形式成分、意味成分類型表示の補助的手段

として、形式成分及び意味成分の類型を表示するための機能語（前置詞、助詞など）の添加が行われる。さらに、経済性の原理によって動機づけられる同一指示成分の処理、また、情報構造に要請される語順の変更などの操作を経て、最終的な表層形式を得るに至る。このため、文形成メカニズム解明の課題は大きく3つあることが分かる。1つは形式構造の解明、もう1つは意味構造に関する規定、制約、及び意味成分に記載されていると思われる意味成分と形式成分の対応関係の解明、そして3つ目として、表層の形式における形式成分、意味成分の類型表示をはじめ、経済性の原理、情報構造などによって動機づけられる形式構造上の制約、規定の解明が挙げられる。この章では具体的な事例を示し、文形成のこうしたプロセスについて概観する。

4.2 形式構造について

4.2.1 形式構造の類型、形式成分の構成

文形成の第一歩は意味構造の構築であるが、意味成分には形式成分との対応関係が記載されており、このような対応関係に基づいて意味成分が形式成分に配置されて、意味成分が一行に並んだ表層の形式が得られるのである。従って、意味成分の構築を考える前に、言語話者が内的に持っている形式構造の知識について概観しておく必要がある。

形式構造はそれを構成する形式成分（意味成分配置領域）の連続である。形式構造のパターン、つまり形式構造内部に含まれる形式成分の数と類型、形式成分の配置の仕方は1つの言語において1つのみである。形式構造は言語話者が無意識的でありながら、母語について内的に持っている「既知」の知識であり、その言語社会で共有されている知識である。意味構造のように、毎回新たに組み立てる必要はない。形式成分は意味成分を配置するための領域のことで、その実在は対応する意味成分の存在によって証明される。ここでは意味成分配置の規定性の事実を観察し、形式成分の実在性、形式成分の類型、及び中国語の形式構造について具体的に見ることにする。

中国語は旧来SVO型言語といわれ、事象成分とその従属成分である主体成分と客体成分からなる意味構造の場合、主要成分である事象成分を真ん中に据え、その前後に主体成分と客体成分を配置する。動作事象「去」を例に示すと、次のようになる。

(2) 张三 去 健身房。

従って、形式の構造として、中国語には最低限これら3つの意味成分の対応する3つの形式成分が存在することが分かる。事象成分に対応する真ん中の形式成分を $\{0\}$ とし、その前後の形式成分をそれぞれ $\{+\}$ $\{-\}$ として表示すると、次のようになる。

(3) $\{+\}$ $\{0\}$ $\{-\}$

张三 去 健身房

次に、〈時間〉や〈頻度〉、あるいは〈場所〉、〈相手〉のような補助成分は次のように、 $\{0\}$ の左側、 $\{+\}$ と $\{0\}$ の間に配置される。

(4) 张三 [每天] 去 健身房。

张三 [经常] 去 健身房。

张三 [跟朋友] 去 健身房。

张三 [在健身房] 消磨 时间。

すると、 $\{0\}$ の左側には $\{+\}$ 以外に、もう1つの形式成分が存在することが分かる。これら2つの形式成分を区別して、 $\{0\}$ に近い順に $\{+1\}$ 、 $\{+2\}$ として示すと、形式構造表示は次のようになる。

- (5) { + 2 } { + 1 } { 0 } { - }

张三 [每天] 去 健身房。

张三 [经常] 去 健身房。

张三 [跟朋友] 去 健身房。

ちなみに、1.3節でも言及したように、この { + 1 } の形式成分はやや特殊で、他の形式成分には1つの意味成分しか収納できないのに対して、{ + 1 } には複数の意味成分が共起可能で、互いの修飾、限定関係、及び意味的整合性が許すかぎり、次の例が示すように、その形式成分内に限り、ある程度の位置交替が可能である。

- (6) 张三 [每天 都 跟朋友] 去 健身房。

张三 [跟朋友 每天 都] 去 健身房。

次に、次の例のように、文中に〈動量成分〉と〈着点成分〉が含まれる場合、これらの意味成分は { 0 } の右側、{ 0 } と { - } の間に配置される。

- (7) 张三 每周 去 [三次] 健身房。

张三 上午 送 [到机场] 几个客人。

従って、{ 0 } の右側には { - } 以外にもう1つの形式成分があることが分かる、同じように、{ 0 } に近い位置順に { - 1 }、{ - 2 } で示すと、形式構造表示は次のようになる。

- (8) { + 2 } { + 1 } { 0 } { - 1 } { - 2 }

张三 每周 去 [三次] 健身房。

张三 上午 送 [到机场] 几个客人。

最後に、次の例が示すように、文中に事象の〈結果・程度〉成分が含まれる時は、 $\{0\}$ の右側、 $\{-2\}$ のさらに右側に配置される。

(9) 张三 看书 看 [成了近视眼]。

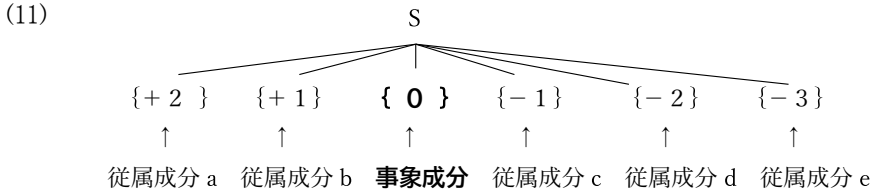
张三 去 健身房 去 得 [很勤]。

従って、 $\{0\}$ の右側において、 $\{-1\}$ 、 $\{-2\}$ のほかにもう1つの形式成分があり、 $\{-3\}$ とすることができる。形式成分表示は最終的には次のようになる。

(10) $\{+2\}$ $\{+1\}$ $\{0\}$ $\{-1\}$ $\{-2\}$ $\{-3\}$
张三 ・ ・ 看 ・ ・ 书 [成了 近视眼]。
张三 ・ ・ 去 ・ ・ 健身房 [很勤]。

なお、実際の表層の形式では、(9)が示すように、 $\{0\}$ 成分が一度反復される。また、〈結果・程度〉を担う言語単位の構造によって、助詞「得」の添加が要求されることもある。これらの操作は形式上における形式成分表示上の要請によって、表層のレベルで添加された機能的要素で、詳細はこの後の 4.5 で述べることにする。

以上、意味成分との対応関係に基づいて、形式成分の実在性、及びその類型、配列について観察してきた。整理して示すと、事象成分を中心に、両サイドに従属成分を従える中国語の形式構造は次のようになる。



周知のように、伝統文法では位置、意味機能、品詞類型の3つの情報で定義する統語成分の概念があり、「主語、述語、賓語、状語、補語、定語」の6つの統語成分が用いられてきた。便宜上、その「位置情報」を生かして、単なる意味成分の「配置位置」、すなわち形式成分を表す概念として再定義し、活用することができる。ただし、6つの統語成分のうち、いわゆる「定語」は統語成分を担う名詞フレーズの補部のことで、1つ下位レベルの構成素である。文の直接構成素に相当するのは「主語、述語、賓語、状語、補語」の5つである。また、いわゆる「補語」は他の統語成分と違って、事実上意味機能を中心に定義されているもので、その位置情報が際立って不安定で、少なくとも2つに分かれているのである。伝統文法では次の(12)、(13)のなかの[]の部分はいずれも「補語」と呼んでいる。

(12) 张三 去过 [一次] 夏威夷。

张三 送 [到机场] 几个客人。

(13) 张三 看书 看 [成了 近视眼]。

张三 看书 看 得 [很累]。

2種類の「補語」の位置情報は明かに異なる。次の(14)が示すように、(12)のなかの「一次」と「到机场」はいずれも $\{-1\}$ に相当する位置に、(13)のなかの「成了近视眼」、「很累」は $\{-3\}$ に相当する位置である。

(14) { + 2 } { + 1 } { 0 } { - 1 } { - 2 } { - 3 }

去过 [一次]

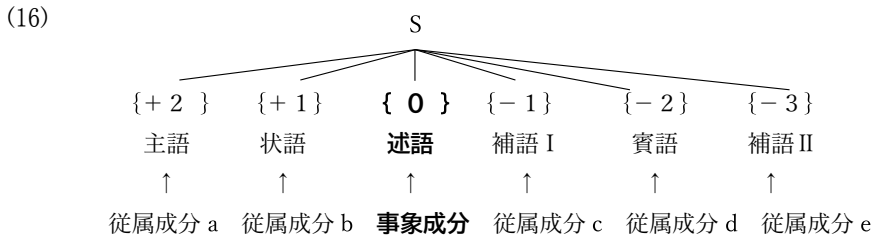
放 [到机场]

(15) { + 2 } { + 1 } { 0 } { - 1 } { - 2 } { - 3 }

看 [成了 近视眼].

看 [很累]

このため、伝統文法の統語成分の概念を単なる位置情報を表す概念として活用するには、2つの補語の位置を区別し、別の用語を用いる必要がある、ここではとりあえず「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」とする。これらの統語成分のそれぞれが持つ位置情報を、該当する形式成分の類型に当てはめて示すと、次のようになる。



以下の議論のなかでは便宜上、再定義されたこれらの用語を並行して、「{ + 2 } (主語)、. . .」のように用いることにする。

4. 2. 2 形式成分の情報

形式構造を構成する形式成分は上記の表示のように、第一にはそれぞれが自身の位置に関する情報 ({ 0 } (述語)、 { + 2 } (主語)、 { - 2 } (賓語)、. . .) を持っている。位置情報は形式成分の類型を特徴づける情報の1つで、形式成分

類型識別上最も重要な情報である。位置情報のほかに、形式成分には品詞類型に関する情報も持っている。このことは、形式成分の類型によって配置される言語単位に対して、しばしば機能語の添加をはじめとする変形が要求される事実から確認できる。例えば次の(17)、(18)、(19)が示すように、{ + 1 }（状語）に置かれる意味成分を担う言語単位に対して、副詞成分には助詞「地」の添加は任意で、基本的に裸の形でも配置することが可能であるのに対して、名詞成分には前置詞の添加が、また、形容詞成分には助詞「地」の添加や、あるいは重ね型化が義務的に要求される。

(17) 张三 经常 迟到。

张三 经常地 迟到。

(18) *张三 李四 当 向导。

张三 [给] 李四 当 向导。

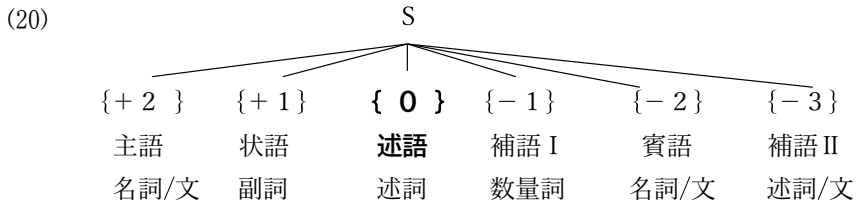
(19) *张三 高兴 接受了 邀请。

张三 高兴 [地] 接受了 邀请。

张三 [高高兴兴 (地)] 接受了 邀请。

このような事実は、状語 { + 1 } に配置される言語単位は「副詞」でなければならないという品詞類型に関する制限があり、副詞以外の名詞性成分や形容詞性成分をここに配置する時には語形の変更が要求されることを示すものである。このような変形操作は事実上、状語に配置される名詞成分の非名詞化、形容詞成分の非形容詞化の操作である。また、非名詞化、非形容詞化の操作を経てはじめて副詞と同等の資格を得て、状語に配置することが可能になることは、副詞以外の言語単位の「副詞化」の操作であるともいえる。つまり、形式成分には品詞類型に関する情報、または制限があり、品詞類型の情報に合致する意味成分の担い

手となる言語単位のみ配置可能で、合致しない言語単位については、語形変化を伴う品詞類型の変更が要求されるということである。中国語の6つの形式成分はそれぞれ次の(20)のような品詞類型の情報(あるいは制限)を持っていると思われる。



形式成分にはこのように品詞類型の情報を持っているが、そのため、品詞類型の情報は逆に形式成分タイプの識別に機能する情報である。例えば、形式成分 {+ 2 } (主語) の識別について、上の (20) が示すところによれば、{ 0 } (述語) の左側に配置される名詞性成分は {+ 2 } (主語) のみである、従って、「{ 0 } (述語) 成分の前の裸の名詞が {+ 2 } (主語) である」ということになり、次のような文に対して、中国語話者ならば { 0 } (述語) (「买」の前にある裸の名詞「张三」を {+ 2 } (状語) と解釈するのである。

(21) [张三] 买了一件 毛衣。

ところが、次の文では、{ 0 } (述語) の前に裸の名詞が2つある、そのため、2番目の裸の名詞「弟弟」が占める形式成分の類型は不明となる。品詞類型に関する規定では、{ 0 } (述語) の前の2番目の位置 {+ 1 } (状語) の品詞類型は「副詞」でなければならないが、「名詞」という情報はこのような規定に合致しないからである。

(22)?? 张三[弟弟] 买了一件 毛衣。

このため、「弟弟」が示している位置は { + 1 } (状語)であることを示すには、次の(23)のように、これに前置詞を添加し、「非名詞化」(あるいは「副詞化」)の操作を加え、その左隣にある { + 2 } (主語)の位置に配置される名詞成分と形態上差別化することではじめて { + 1 } (状語)と認められ、正しく識別されるのである。

(23) 张三[给弟弟] 买了一件 毛衣。

一方、(23)の例と対照的に、中国語話者にとって、次の例における「经常」が占める位置は紛れもなく { + 1 } (状語)であると認識する。(20)が示すところによれば、{ 0 } (述語)の前の副詞性成分は { + 1 } (状語)だからである。

(24) 张三[经常] 去 健身房。

このように、形式成分は位置情報のほかに、品詞類型の情報も持っており、位置情報と品詞類型の2つの情報によって定義されるものである。

4.3 意味単位の構築

4.3.1 意味成分の情報

形式構造のパターン(つまり形式成分の数、類型、配置の仕方)は1つの言語において1つのみであるのに対して、意味構造の方は、意味成分の構成に関する規定や制約については言語社会で共有されていて、言語話者にとって「既知の」知識であるものの、意味成分の構成自体は文によって異なるので、具体的な文形成に当たっては、伝えようとする意味によって、その都度構築されるものである。次の「张三大学的时候学过三年日语。」という文は6つの意味成分からなってい

るので、構文の第一歩はこれら6つの意味成分を、それぞれを担うのにふさわしい言語単位とともに用意し、意味構造を構築することになる。

(25) {张三} {大学的时候} {学} {过} {三年} {日语}。

意味成分には第一に、当該文中で担う意味機能の情報が付与されている。こうした意味機能の情報をもとに、意味成分と形式成分の対応関係に基づいて形式成分に配置されるのである。(25)が含む6つの意味成分の意味機能情報を示すと次のようになる。

(26) { 学 (事象<動作>)
 张三 (主体<動作者>)
 日语 (客体<被動作者>)
 大学的时候 (補助体<時間>)
 三年 (補助体<動量>)
 过 (機能語<過去の経験>)

上の表示では6つ意味成分が対等の形で並べられているが、意味成分には主要成分と従属成分の違いがあることを考えると、より正確には次のように示すべきかもしれない。

(27) { 学 (事象<動作>)
 { 张三 (主体<動作者>)
 { 日语 (客体<被動作者>)
 大学的时候 (補助体<時間>)
 三年 (補助体<動量>)
 过 (機能語<過去の経験>)

意味機能のほかに、意味成分にとって、それを担う言語単位の品詞類型の情報も有意な情報である。意味成分は語やフレーズなど、何らかの言語単位によって担われる、言語単位には品詞類型の情報を持っている。前述のように、意味成分の配置領域である形式成分には品詞類型に関する制限があり、形式成分に配置される意味成分には当該形式成分の品詞類型に関する制限に合致する必要がある、合致しない場合は前置詞や助詞をはじめとする機能語の添加や、重ね型化など、形態上の変更が要求される。従って、意味成分にとって、それを担う言語単位の品詞類型の情報は必要な情報で、意味構造に反映する必要がある。品詞類型の情報を追加した意味構造表示は次のようになる。

(28) 学 (事象<動作>・述詞)

- 张三 (主体<動作者>・名詞)
- 日语 (客体<被動作者>・名詞)
- 大学的时候 (補助体<時間>・時間詞)
- 三年 (補助体<動量>・数量詞)
- 过 (機能語<過去の経験>・助詞)

意味成分にはまた形式成分との対応関係の情報があり、こうした対応関係の情報は経済性の観点から、意味成分側に記載されているものと考えるのが合理的であることについてこれまでのなかで述べてきた。従って、意味成分に対応する形式成分の情報 { 0 } (述語)、{ + 1 } (主語)、{ + 2 } (状語)、・・・) を追加すると、意味構造の表示は最終的には次のようになる。

(29) 学 (事象<動作>・述詞・{ 0 } (述語))

- 张三 (主体<動作者>・名詞・{ + 2 } (主語))
- 日语 (客体<被動作者>・名詞・{ - 2 } (賓語))
- 大学的时候 (補助体<時間>・時間詞・{ + 1 } (状語))

三年 (補助体<動量>・数量詞・{ - 1 } (補語 I))
过 (機能語<過去の経験>・助詞・{ 0 } (述語))

このように、意味成分には文中におけるそれ自身の意味機能と、それに担う言語単位の品詞類型、さらに形式成分の対応関係の3つの情報が記載されていると考えられる。

4.3.2 意味的適格性の要件

意味構造は文の意味的適格性を保証する責任を負う。文には当然のことながら、意味的適格性が要求される。文の意味的適格性は意味構造の適格性によって保証される。従って、意味構造には意味的適格性に関する規定があると考えられる。意味的適格性に関する規定には「項構造」に関する規定と、意味成分とそれを担う言語単位の間の「意味的整合性」に関する規定の2つがある。項構造に関する規定とは、事象成分の類型によって最低限満足させなければならない従属成分の数と類型に関する規定のことで、意味的整合性に関する規定とは、意味成分を担う言語単位はその意味成分を担うのにふさわしい語彙の意味を有しなければならないという規定である。次の3つの意味構造はこれら2つの規定のいずれにも違反しない適格な意味成分構成の例である。

(30) 唱起了 (事象<動作>・述詞・{ 0 } (述語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{ + 2 } (主語))
歌儿 (客体<被動作者>・名詞/文・{ - 2 } (賓語))
高兴 (補助体<様態>・名詞・{ - 1 } (状語))

(31) 买了 (事象<動作>・述詞・{ 0 } (述語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{ + 2 } (主語))
一个蛋糕 (客体<被動作者>・名詞/文・{ - 2 } (賓語))

| 対面的面包店 (補助体<場所>・場所・{+1} (状語))

(32) 放 (事象<動作>・述詞・{0} (述語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{+2} (主語))
 一个蛋糕 (客体<被動作者>・名詞/文・{-2} (賓語))
 冰箱 (補助体<着点>・名詞・{-1} (補語 I))

ちなみに、上記3つの意味構成の形式的展開はそれぞれ次のようになる。

(33) 张三 高兴地 唱起了 歌儿。

张三 在対面的面包店 买了 一个面包。

张三 放 进冰箱 一个蛋糕。

対して、次の2つの意味構造は事象成分が要求する必需成分が一部欠如している例で、項構造の規定に違反する不適格な意味構造の例である。(34) では、二項事象の「买」が要求する<被動作者>成分が、(35) では3項事象の「放」が要求する<着点>成分がそれぞれ欠如している。

(34) 买了 (事象<動作>・述詞・{0} (述語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{+2} (主語))
 上午 (補助体<時間>・時間詞・{+1} (状語))
 対面的面包店 (補助体<場所>・名詞・{+1} (状語))

(35) 放 (事象<動作>・述詞・{0} (状語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{+2} (主語))
 一个蛋糕 (客体<被動作者>・名詞/文・{-2} (賓語))
 刚才 (補助体<時間>・時間詞・{+1} (状語))

なお、上記2つの意味構成の形式的展開はそれぞれ次のようになる。

(36) ? 张三 上午 在面包店 买了。

? 张三 刚才 放了一个蛋糕。

次は意味成分類型とそれを担う言語単位の意味的整合性に問題がある不適格な意味構造の例である。(37) では<動作者>を担うのに不適切な非有生名詞「蛋糕」が、<被動作者>を担うのに不適切なく一个张三>が用いられている。(38) では被動作者である「冰箱」の<着点>を担うのに不適切な「蛋糕」が用いられている。

(37) 买了 (事象<動作>・述詞・{ 0 } (述語))

{ 蛋糕 (主体<動作者>・名詞・{ + 2 } (主語))
一个张三 (客体<被動作者>・名詞/文・{ - 2 } (賓語))
上午 (補助体<時間>・時間詞・{ + 1 } (状語))

(38) 放 (事象<動作>・述詞・{ 0 } (述語))

{ 张三 (主体<動作者>・名詞・{ + 2 } (主語))
一个冰箱 (客体<被動作者>・名詞/文・{ - 2 } (賓語))
蛋糕 (補助体<着点>・名詞・{ - 1 } (補語 I))

上記2つの意味構造の形式的展開は次のようになる。

(39) ? 蛋糕 买了一个张三。

? 张三 放进 蛋糕 一个冰箱。

4.4 形式成分への意味成分配置

伝達の意図によってその都度構築される意味構造だが、言語話者が内的に持っている形式構造、及び意味成分と形式成分の対応関係に関する知識に基づき、意味成分が対応する形式成分に配置され、深層の形式構造（あるいは「基本形式」）が形成される。例えば、(20) に示した形式構造に、(29)、(30)、(31)、(32) の意味構造を適用すると、それぞれ (40) の a、b、c、d のようになる。

(40)	+ 2	+ 1	0	- 1	- 2	- 3
	主語	状語	述語	補語 I	賓語	補語 II
a.	张三	大学的时候	学过	三年	日语	…
b.	张三	高兴	唱起了	…	歌儿	…
c.	张三	对面的面包店	买了	…	一个蛋糕	…
d.	张三	…	放	冰箱里	一个蛋糕	…

なお、上の例示で分かるように、このレベルで挿入されるのは意味単位の構成成分である意味成分の本体のみである。実際の表層の形式では、前置詞や助詞など、形式成分の類型及び意味成分の類型を示す機能語が要求されたり、また、形容詞の重ね型化など、対応する形式成分の類型によって、意味成分を担う言語単位の形態変化が要求されたりすることがある。さらに、形式成分との対応関係に揺らぎがあったり、意味的に実在する意味成分が形式上空白となっていたりすることもある。これらの変形は形式上における形式成分ないし意味成分類型表示の要請によって動機づけられるもので、次節で述べるように、意味成分が配置された後、形式構造の制約によって、表層のレベルで行われる操作であると考えられる。

4.5 形式上の調整

意味成分の類型は形式上何らかの標識で表示される。聞き手及び読み手がこれ

らの標識を手掛かりに、個々の意味成分の類型、すなわち意味機能を認識し、文の意味を読み取るのである。形式上における意味成分類型表示の手段は言語の
よって同じではない。従来、孤立型言語と考えられてきた中国語では、第一に、
意味成分を担う言語成分の語彙的意味や、意味成分が配置される形式成分の類型
(つまり語順)、さらに品詞類型の情報など、いわば意味成分と形式成分自身の固
有の情報が意味成分類型の表示に総合的に機能する。他方、これらの情報が不十
分な時には、表層の形式上で他の補助的表示手段を添加することでこれを補完す
るようになっている。これらの補助的手段には機能語（前置詞、助詞）の添加、
語形の変化、述語動詞の反復などが挙げられる。また、意味成分類型表示の要請
以外に、表層の形式上では、情報構造からの要請、及び冗長性を避けるという経
済性の原理によって動機づけられる変形操作も行われる。

4. 5. 1 前置詞の添加

次の(41)は前記(31)の意味構造を例に、意味成分が形式成分に配置され、
線形に展開する過程を示したものである。aは意味成分のみが配置された原型で、
bは意味成分類型表示上必要な機能語の添加が行われた後の実際の形式である。

(41) a. {张三} {対面的面包店} {买} {了} {一个蛋糕}。

b. 张三 [在] 对面的面包店 买了一个蛋糕。

ここでは、{ + 1 } (状語) には名詞によって担われ、動作・行為が行われる
く場所>の意味機能を担う意味成分「対面的面包店」が配置されている。実際の
形式には意味成分には含まれていない前置詞「在」が義務的に添加されている。
「対面的面包店」の品詞類型は名詞で、副詞を要求する { + 1 } (状語) に配置
される時には、形式上、前置詞の添加によってこれを「非名詞化」する操作が要
求されることを示している。「非名詞化」の効果をもたらす前置の添加は、その
前の位置にあり、同じ名詞成分で担われる { + 2 } (主語) との混同を避ける

という形式成分の類型を示す役割を果たす一方で、他方では、前置詞の種類の違い（「在」、「为」、「给」、「替」など）によって、当該意味成分が類型、つまり意味機能を直接的に示す役割も果たしている。

次の(42)は前記(32)の意味構造が線形展開される過程を示す例である。ここでは{ - 1 } (補語) に名詞によって担われる<着点>成分「冰箱」が配置され、そして実際の形式には、{ + 1 } (状語) に配置される名詞成分と同様、意味構造では含まれていない前置詞「进」が添加されている。¹

- (42) a. {张三} {放} {冰箱} {一个蛋糕}。
 b. 张三 放 [进] 冰箱 一个蛋糕。

このような事実は、{ - 1 } (補語 I) においても、名詞性成分が配置された時には前置詞の添加が義務付けられていることを要求することを示している。この位置には、例えば「我学过三年日语。」「他去过一次北海道。」のように、<動量>成分を担う数量詞が裸の形で配置できることを考えれば、その品詞類型の規定は「数量詞」であることが分かる、この位置に配置される名詞成分への前置詞の添加は{ + 1 } (状語) の場合と同様、「非名詞化」のための操作である、また、非名詞化の理由は、これに後続し、名詞成分を要求する{ - 2 } (賓語) との混同を避けることを可能にするからと考えられる。

{ + 1 } (状語) に時間詞が配置されることがある。{ + 1 } (状語) に時間詞が配置される時の振る舞いはやや特殊で、つまり、前置詞の添加は任意的である。次の(43)はこのような事実を示す例である。

- (43) a. {张三} {大学的时候} {学过} {三年} {日语}。
 b. 张三 [在] 大学的时候 学过 三年 日语。
 c. 张三 大学的时候 学过 三年 日语。

この文のなかで、「大学の時候」は形式成分の { + 1 } (状語) に対応し、動作・行為が行われる<時間>を表す意味成分である。<時間>成分は時間詞によって担われる、「大学の時候」はここでは時間詞として用いられている。他方、時間詞は主体成分を担い、裸の形で { + 2 } (主語) に配置されることも、また、客体成分を担い、{ - 1 } (賓語) に配置されることも可能であるといった事実が示すように、本来は名詞である。例 (43) は、このような時間詞が { + 2 } (状語) に配置される時は、名詞と同じように、前置詞添加して用いることも (b)、あるいは副詞と同じように、裸の形で用いることも (c) 可能であるということを示している、時間詞がしばしば「時間副詞」とも呼ばれる理由である。

4. 5. 2 述語動詞の反復

次のような文における[累了]のような成分は事象成分の<結果・程度>を表す成分である。このような成分は (44) が示すように、{ - 1 } (賓語) よりもさらに後の { - 3 } (補語Ⅱ) の位置、つまり、一番右側の形式成分に配置される。

(44) 他 看书看[累了]。

このような構文の表層形式の特徴は事象成分を担う { 0 } (述語) 「看」を一度繰り返すことである、このため、{ 0 } (述語) 反復の動機づけが課題である。「累了」はここでは事象成分以外の他の成分と並んで、従属成分の1つである。このような意味成分は2つの点で特殊である。1つは、これを担う言語単位の品詞類型は事象成分と同じ述詞 (動詞または形容詞) である。もう1つは、事象成分が配置される { 0 } (述語) からは距離的に最も離れている点である。これらの特殊性によって、当該成分が独立した事象成分であるか、あるいは同じ意味構造の一成分であるか、特に長文の場合、紛らわしくなることが考えられる。{ 0 } (述語) として実現する事象成分をその直前で一度繰り返すことで、事象成分と当該成分との関係性、つまり当該成分は同一の事象成分の従属成分の1つ

であることをより明示的に示し、構造的曖昧性、紛らわしさを解消させる効果があると考えられる。

4.5.3 助詞の添加

表層形式のレベルで助詞の添加が要求されることがある。助詞の添加が要求されるケースは次の2つある。

1つは助詞「地」の添加である。(45)の意味構造には補助体を担う形容詞成分「高兴」が含まれている、このような成分は{+1}（状語）に配置される。例が示しているように、{+1}（状語）に形容詞が配置される時、助詞「地」の添加が義務つけられる。

(45) a. {张三} {高兴} {唱起了} {歌儿}。

b. 张三[高兴地]唱起了歌儿。

繰り返して述べているように、形式成分{+1}（状語）の品詞類型の規定は副詞である。形容詞性成分はそのままの形ではここには配置できず、助詞「地」を添加することで、形態上で形容詞と差別化を図ったうえではじめ配置することが可能であることを示している。従ってこの場合の助詞「地」を添加する理由は、同じ形式成分に配置される名詞成分に前置詞を添加する場合と同じで、形容詞成分の「非形容詞化」操作である。また、形容詞は述詞の1つとして事象成分を担い、{+1}（状語）の後に位置する{0}（述語）に配置することもできることから、事象成分以外の{+1}（状語）に配置される時のこうした形態上の非形容詞化操作によって、その後に位置する{0}（述語）との混同を避けるためにも役に立つ。

形式構造上助詞の添加が要求されるもう1つのケースは次の(46)のような、〈結果・程度〉成分「我很累」の前に、{0}（述語）の反復とともに行われる助詞「得」の添加である。

(46) {我} {看} {书} -- -- {我很累}。

(--) 看 书 看得 我很累。

(46) は前の (44) と同じで、{ - 3 } (補語Ⅱ) の位置に〈結果・程度〉成分が配置されている形式である、{ 0 } (述語) の反復に加えて、助詞「得」が添加されていることが異なる点である。ここでは、助詞「得」添加の動機付けが課題となる。結論から言うと、{ - 3 } (補語Ⅱ) に配置される〈結果・程度〉成分を担う言語単位の構造と関係する。次の (47)、(48) が示すように、〈結果・程度〉成分が V(N) 構造であれば、{ 0 } (述語) 成分が反復するのみで、〈結果・程度〉成分が NV(N) 構造であれば、{ 0 } (述語) の反復に加えて、助詞「得」の添加も要求されるということである。

(47) 我 看书 看 [累了]。

看书 [看 成了 近视眼]。

(48) 看 书 看得 [我很累]。

讲故事 讲得 [小孩儿 入了 迷]。

4.5.4 形容詞状語の重ね型化

次の例のなかで副詞として用いられ、{ + 1 } (状語) に配置されている「静静」、「高高兴兴」は明らかに形容詞「静」、「高兴」の重ね型である。{ + 1 } (状語) に形容詞性成分が配置される時はその形容詞成分が重ね型に変化することを要求することを示している。

(49) 女孩儿 [静静 (地)] 望着 窗外。

[高高兴兴 (地)] 上班、[平平安安 (地)] 回家。

このような変化も { + 1 } (状語) に形容詞が使用される時に助詞「地」の添加の役割と同様で、形式成分の品詞類型に関する規定に合致させるための非形容詞化、あるいは副詞化の操作の一種である。最終的にはその後に位置し、形容詞性成分が配されうる { 0 } (述語) との混同を避けることを可能にする操作である。また、例が示すように、このような場合は助詞「地」の添加も可能だが、任意的である。つまり、規則上「地」の添加が必要だが、重ね型化によってすでに形態上形容詞との差別化が図られており、非形容詞化の目的が達成されているので、「地」の添加は余剰的となり、任意的になっていることが理由であると考ええる。

4.5.5 情報構造と形式成分の選択

意味成分の形式成分への配置は基本的に意味成分に記載されている両者の対応関係に基づいて行われるが、こうした対応関係は情報構造に左右されることもあり、揺らぎがある。ここでは<客体>成分を例に見てみることにする。一般的に、動作事象の客体成分は次のように、{ -2 } {賓語} に配置されるとして知られる。

(50) 张三 送到了机场 [几个客人]。

李四 贴 在了墙上 [一张照片]。

ところが、賓語の位置に配置される<客体>成分は、(50) にある「几个客人」、「一张照片」のような「非特定」の対象、つまり「多数あるものや人の中の 1 つ、1 人である」ことに限定される。次の (51)、(52) の { -2 } (賓語) に配置されている「那个客人」、「他的妹妹」のような「特定の」、あるいは話し手と聞き手の双方にとって「旧情報」である場合は不適格となる。

(51) ? 张三 送到了机场 [那个客人]。

? 张三 送到了机场 [他的妹妹]。

(52) ? 李四 貼 在了墙上 [那张照片]。

? 李四 貼 在了墙上 [他的照片]。

このような場合は次の (53)、(54) のように、その「特定の」、あるいは「旧情報」である<客体>成分は { + 1 } (状語) への配置転換、あるいは移動が要求される。また、移動の結果、{ + 1 } (状語) には名詞成分が配置することになり、前置詞の規則に基づき、さらに前置詞の添加が要求される。この場合、意味成分の類型 (<客体>) により、前置詞は「把」が選ばれる。

(53) 张三 [把那个客人] 送 到了机场。

张三 [把他的妹妹] 送 到了机场。

(54) 李四 [把那张照片] 貼 在了墙上。

李四 [把他的照片] 貼 在了墙上。

このような事実は意味成分の配置は情報構造に左右されることがあることを示すものである。より具体的に言えば、「焦点の右側移動」の原則に従い、より重要な情報が右側に残るように配置位置が調整された結果であると考ええる。なお、観察されるところでは、情報構造によって動機づけられるこうした意味成分の移動は基本的に元の位置から相対的に左側への移動に限定される。また、移動先は既存の形式成分のほかに、主語よりさらに左側の文頭の位置になることもある。次の (55)、(56) のなかの b 文はいずれもこうした理由に起因する意味成分の移動、あるいは配置転換の結果であると考ええる。

(55) a. 张三 星期三 出差。

b. 星期三 张三 出差。

- (56) a. 我 去过 上海, 没 去过 广州。
 b. 上海 我 去过, 广州 我 没 去过。(劉・潘・故 1983)

4.5.6 同一指示成分

文中に同一指示成分が含まれる場合、その一方が消去されても意味的にその実在が予測できる場合は、冗長性回避の観点から消去することが可能で、あるいは望ましい場合がある。同一指示成分の消去には次の(57)、(58)のように、順行消去と逆行消去がある。消去の順行と逆向の違いによって、表層の形式も異なってくる。こうした同一指示成分の消去は表層のいわゆる異形同義文(曖昧文)が生じる一因である。

- (57) ? 那个小孩儿 追 [我] 追 得 [我] 上气不接下气。

↓

那个小孩儿 追 [□] □ 得 [我] 上气不接下气。

- (58) ? [我] 追 那个小孩儿 追 得 [我] 上气不接下气。

↓

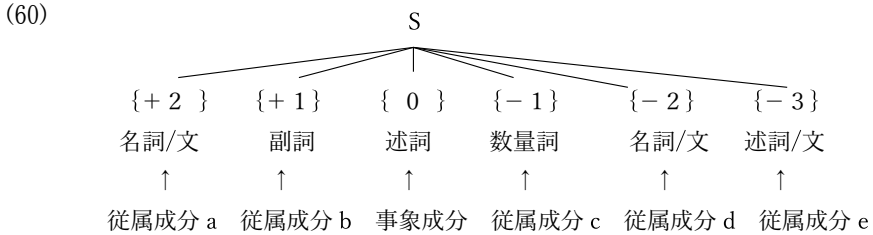
- a. [我] 追 那个小孩儿 追 得 [□] 上气不接下气。
 b. [□] 追 那个小孩儿 追 得 [我] 上气不接下气。
 c. [□] □ 那个小孩儿 追得 [我] 上气不接下气。

また、消去によってその成分の実在が予測できず、消去できない場合は、同一指示成分の一方を代名詞や「再帰代名詞」と交替させる操作を行う。

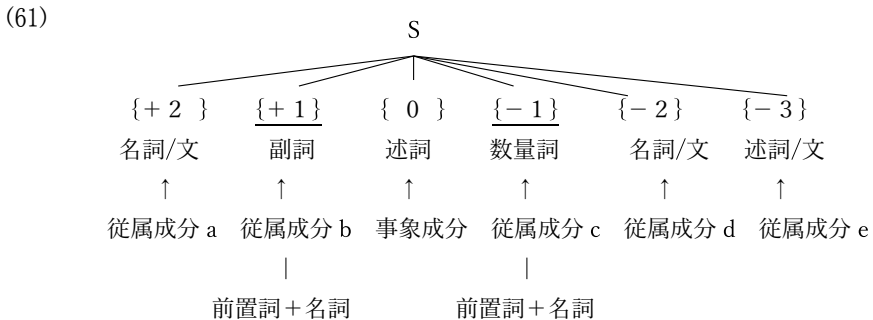
- (59) a. ? [张三] [把张三] 的 自行车 借给了 李四。
 b. [张三] [把他] 的 自行车 借给了 李四。
 c. [张三] [把自己] 的 自行车 借给了 李四。

4.5.7 前置詞の規則、なぜ前置詞か

これまでは中国語の形式構造表示について次のように提案してきた。



また、形式構造を構成する6つの形式成分のなかで、形式成分の類型によって、名詞性成分が配置される時には前置詞の添加が要求されることも見た。前置詞の添加が要求される形式成分の類型に特徴がある、つまり、次の例が示すように、左側と右側のそれぞれ {0} (述語) に一番近い位置である {+1} (状語) と {-1} (補語) である。



よって、前置詞の規則として、次のように述べることができる。

(62) 前置詞の規則

- I. { + 1 } (状語) に配置される名詞成分には前置詞を添加せよ。
- II. { - 1 } (補語) に配置される名詞成分には前置詞を添加せよ。

他方、名詞成分が配される可能性があるのは、{ 0 } (述語) の左側において { + 2 } (主語) と { + 1 } (状語) の2つの成分で、右側は { - 1 } (補語) と { - 2 } (賓語) の2つの成分である。そのなかで左側の { + 1 } (状語) に、右側の { - 1 } (補語) に前置詞を添加する結果、左側では、裸の名詞で担う形式成分は { + 2 } (主語) のみとなり、右側では { + 2 } (賓語) のみとなる。よって、より簡潔に、前置詞の規則は次のように述べることもできる。

(63) 前置詞の規則 (改訂)

左側においては { + 2 } (主語) 以外の名詞成分に、右側においては { - 2 } (賓語) 以外の名詞成分に前置詞を添加せよ。

ちなみに、前置詞を要求する理由については、{ + 1 } (状語) と { - 1 } (補語) はそれぞれ副詞と数量詞を要求する形式成分で、名詞成分に前置詞の添加は対象となる名詞成分の非名詞化の操作であるこれまで述べてきたところである。さらに、非名詞化はその前方、またその後方に位置する名詞成分を要求する { + 2 } (主語) と { - 2 } (賓語) との混同を避けることを可能にする操作であることも述べてきた。なお、前置詞添加の結果、品詞類型の情報がより一層形式成分類型の識別に役に立つことになる。つまり、述語の左側においては、裸の名詞は主語で、それ以外は補語である、また、述語の右側においては、裸の名詞は賓語で、それ以外の品詞類型は補語 I か、補語 II である、ということになる。(補語 I と補語 II の違いはさらに品詞類型や、反復された述語、及び添加された助詞「得」などの情報によって識別される。)

4.5.8 形式成分表示と意味成分の表示

この節では、意味成分が形式成分に投入された後で得られる文の基本形式に対する変形操作について見てきた。これらの操作は大きく分けて、形式成分類型、及び意味成分類型表示に関する操作と、経済性原理、情報構造の違いによって動機づけられる操作がある。

前置詞、助詞（「得」）の添加などの機能語の使用、及び一部の形式成分 { + 1 }（状語）、{ - 1 }（補語 I）における特定の品詞類型（形容詞、名詞）の語形変化、さらに { 0 }（述語）の反復などは、直接的には形式成分類型表示に関する操作である。繰り返し述べてきたように、形式成分と意味成分の間に対応関係があり、形式成分類型の明示により、こうした対応関係の知識をもとに、意味成分の類型が識別されるのである。他方、前置詞には2つの機能がある。まず、前置詞の有無自体は形式成分類型の表示に機能する、他方、前置詞にはさまざまな類型がある、前置詞の類型は意味成分の類型表示に機能する。同じ形式成分に配置される意味成分の類型は文によって（文の意味成分の構成によって）異なることがあり、同じ文中の同一の形式成分に複数共起することもある。前置詞を添加することで形式成分の類型を明示するうえで、さらに前置詞の類型を使い分けることによって、同じ形式成分に配置される意味成分の類型を明示するのである。

表層の形式上における同一指示成分の省略、及び指示詞による代替は冗長性を避けるという経済性の原理によって動機づけられる操作である。他方、情報構造の要請によって動機付けられる操作として、意味成分の配置転換が挙げられる。意味成分の情動的価値によって、配置転換が強制的、あるいは義務的に行われることもある。

4.6 まとめ

文形成は言語話者が内的に持っている自らの言語に関する知識に基づいて行われる。言語に関する知識はさまざまあり、文に関する知識はその1つで、文の形式構造に関する知識と、意味構造及び意味成分と形式成分の対応関係に関する知

識、さらに表層の形式に関する規定、制約などがある。

文は形式上、形式成分の連続である。形式成分には連続における位置情報を持っており、このような位置情報によって特徴づけられ、定義される。形式成分にはまた品詞類型に関する情報（あるいは制限）を持っており、品詞類型の情報に合致しない言語単位には形式の変更が要求される。意味構造は意味成分の集合で、意味成分の構成には主要成分と従属成分、主要成分である事象成分の項構造に関する規定や制約がある。文の形式構造が1つの言語において類型が1つのみであるのに対して、意味の構造、つまり意味成分の構成は、伝達する意味に基づき、意味成分の構成に関する規定や制約に従って、その都度構築される。意味成分にはそれ自身と形式成分の対応関係の情報が記載されており、言語話者の文形成に関する知識の一部となっている。意味成分はこのような意味成分と形式成分の対応関係に基づき、対応する形式成分に配置され、文は「その内部に意味成分が配置された形式成分の連続」である「基本形式」として実現する。文は形式上、意味成分類型及びその意味機能を明示する義務があり、文の意味はそれを構成する意味成分の類型と意味機能の情報を読み取ることで理解される。意味成分類型の識別には意味成分を担う言語単位自身の語彙的意味、意味成分の担体となる形式成分類型が第一の手段として機能する。意味成分、形式成分自身のこうした情報が不十分な場合、補助的に機能語が使用や形態の変化が用いられる。また、冗長性を避けるという経済性の原理、及び情報構造の要請によって、同一指示成分の処置、意味成分の移動などが行われることもある。

* 本稿の刊行にあたり、査読者の方々から丁寧にお読みいただき、単純な誤植、変換ミスまでご指摘いただき、修正できたことを心から感謝いたします。

注

- 1 前章でも言及していたように、本論では、〈着点〉補語に連動して現れる「在」、「進」、「到」などの成分を前置詞と解釈する立場である。詳細については第5章以降の分析に譲る。なお、同じような見解は趙元任1980がすでに示している。

参考文献

(一)

- 北京大学中文系现代汉语教研室 2004《现代汉语》商务印书馆
- 丁声樹 1961《現代漢語語法講話》商務印書館
- 馮蘊澤 2003〈現代漢語單句生成的理論模式〉《文学・言語学論集》9-2 熊本学園大学
- 何元建 2007《生成语言学背景下的汉语语法及翻译研究》北京大学出版社
- 黄伯荣・廖序东 1991《现代汉语》高等教育出版社
- 黎錦熙 1933《新著國語文法》商務印書館 1992
- 林祥楣 1991《现代汉语》语文出版社
- 刘月华・潘文娛・故韓 1983《實用現代漢語語法》外语教学与研究出版社
- 钱乃荣(編) 1995《汉语语言学》北京语言学院出版社
- 沈阳・冯胜利 2008《当代语言学理论和汉语研究》商务印书馆
- 沈阳・郑定欧 1995《现代汉语配价语法研究》北京大学出版社
- 袁毓林 1998《汉语动词的配价研究》江西教育出版社
- 趙元任 1980《中國話的文法》丁邦新譯 香港中文大學出版社
- 朱德熙 1995『文法講義』白帝社

(二)

- 李臨定 1993『中国語文法概論』宮田一郎訳 光生館
- 北川義久・上山あゆみ 2004『生成文法の考え方』研究社
- 福地肇 1985『談話の構造』大修館書店
- 鳥井克之 2008『中国語教学(教育・学習)文法辞典』東方書店
- 中村捷・金子義明・菊地朗 1989『生成文法の基礎』研究社出版

- 中右実（編）1998『格と語順と統語構造』研究社出版
- 中右実・西村義樹 1998『構文と事象構造』大修館書店
- 池上嘉彦 1975『意味論』大修館書店
- 神尾昭雄・高見健一 1998『談話と情報構造』大修館書店
- 小泉保 2007『日本語の格と文型』大修館書店
- 柴谷方良・影山太郎・田守育弘 1982『言語の構造—理論と分析—』くろしお出版
- 柴谷方良 1978『日本語の分析』大修館書店
- 影山太郎 1996『動詞意味論』くろしお出版
- 井上和子・原田かつこ・阿部泰明 1999『生成言語学入門』大修館書店
- チャールズ J・フィルモア 1975『格文法の原理』田中春美、舟城道雄 訳三省堂
- 馮蘊澤 2015「補語・補語構文の構築」『文学・言語学論集』22-2 熊本学園大学
- 馮蘊澤 2022「文形成の深層・中国語の文形成（二）」『文学・言語学論集』29-2 熊本学園大学
- 馮蘊澤 2021「文形成の深層・中国語の文形成（一）」『文学・言語学論集』28-2 熊本学園大学

論句子形成的深層機制 (三)

本章概要

本章在前两章分析的基础上综合观察句子形成机制的问题。语言使用者内在的有关句子的知识具体包括三个方面、(1)由形式成分构成的句子的形式结构、(2)由语义成分构成的句子的语义结构以及语义成分和形式成分的对应关系、(3)有关句子表面形式的规定。一个语言的形式结构的类型只有一种,是存在于说话者意识中的一种潜在的、固定的知识,不需要每次从新组建。而语义结构,由于说话者所要表达的意思每次都不尽相同,因此则需要根据说话者所要表达的意思、在有关语义结构的相关规定的框架下,每次逐个组建。从这个意义上说,造句的第一步实际上是从组建句子的语义结构开始。组建出来的语义结构依据语义成分和形式成分的对应关系投入到形式结构上,于是,抽象的语义结构显现为具体的语义成分的线型连接形式。这便是句子的原始形态。从表面上看,线型连接在一起的每一个语义成分,除了具有其自身的语义功能方面的信息外,还具有其所在的形式成分的位置、以及承载该语义成分的语言单位(词、短语)的所具有的词性方面的信息。对句子的表面形式进行分割所得到的所谓的“句子成分”便正是这种语义成分和形式成分相结合的产物。

句子的意义通过读解线型连接的各个语义成分的语义功能获得理解。因此,在表面的线型连接形式上,语义成分的语义功能需要通过一定的方式显示出来。形式上显示语意成分语义功能的方式有很多,各种因素相辅相成,复杂而巧妙。首先,作为语义成分承载者,词及短语等语言单位本身都具有一定的词义信息,词及短语本身的这种词义信息在显示其所承载的语义成分的语义功能方面起着重要的作用。其次,由于语义成分和形式成分之间具有一定的对应关系,形式成分的类型也起着显示与其所对应的语义成分的语义功能的作用。再次,语义成分的语义功能还可以在

一定程度上从承载该成分的语言单位的词性特征上获得解读。上述特征都是语义成分及其载体本身的固有特征，这些固有特征在显示其语义功能方面有时会有不足，这种情况下需要添加一些辅助性的功能成分来弥补。介词、助词的配备、以及常见的谓词的重复等都是形式上显示语意成分类型及其意义功能的辅助手段。另外，语义成分的排列有时还会受句子的信息结构、以及简洁性的要求等影响，导致表面形式上发生一定的语义成分的位置调整、省略等变化。

